

第35期小田原市図書館協議会第2回協議会会議録

日時：令和5年2月15日（水）午前9時30分から午前11時40分まで

場所：小田原市立中央図書館2階研修室

1 開会

2 文化部副部長挨拶

3 報告事項

（1）図書館を使った調べる学習コンクールの結果について

【資料1】

○石川副館長説明

○質疑応答

[委員長]

毎年、コンクールの審査に関わらせて頂き、年々、応募作品のレベルが高くなっていると感じている。前の年に受賞された方が、また応募してくださるという、非常に嬉しい循環も生まれている。全国コンクールで、奨励賞と佳作を受賞されたとのことで、非常に嬉しく思う。協議会委員から、勝川委員にも審査に加わって頂きましたが、何かコメントがございましたらお話しください。

[勝川委員]

初めて、参加する機会を頂きましたが、審査は、全ての作品を1時間10分ぐらいで見ないといけなかったのが大変でしたが、力作ばかりで、学年によって着眼点が違い、本当に面白く、とても良い経験をさせて頂いた。自分が票を入れた作品が全国コンクールでも評価されて、とても良かったと思っています。

[委員長]

この件について、委員の皆様からご意見等ございますか。

[北河委員]

少しお尋ねしたいことがあるのですが、短い時間の中でどのようなところを評価していらしたのですか。

[委員長]

資料にはないが、審査のポイント的なものがあり、それに基づいて採点している。

[石川副館長]

審査基準は9項目あり、1点目が「学校図書館や公共図書館の資料を活用した研究調査であるか」、2点目が「発達段階に応じたテーマであるか」、3点目が「的確な資料を情報収集出来ているか」、4点目が「複数の資料・情報を活用しているか」、5点目が「使用した資料・

情報の出典が明示されているか」、6点目が「調べる目的・方法・過程などをきちんと示しているか」、7点目が「資料・情報を基に、自分の考えをまとめているか」、8点目が「調べる過程や作品に、主体的に学び、喜びが読み取れるか」、9点目が「情報の整理や表現方法が工夫されているか」等の基準を設け、審査をお願いした先生方に審査基準を示し、審査をお願いした。

[北河委員]

わかりました。大変でしたね。ありがとうございます。

[委員長]

すごくわくわくしました。子ども達がこれだけ、まとめる力というか、そういうものがあった。館長も審査に加わっていただきましたが、何かご感想がありますか。

[図書館長]

先ほど勝川委員もおっしゃっていましたが、それぞれが力作で、やっぱり学年が低い子は低い子なりの観点があり、大人とは違う観点で、むしろ新鮮な感じがした。そういった関心をもってもらい、調べて、最終的に表現していくという一連の流れについては、作品を見てしっかり感じられた。図書館がどういう役割を果たせるか、これからも色々と考えていきたい。こういったコンクールはもちろん大事なのですが、そこに至るための本を揃え、見てもらえるような環境を整えていくということが大事だと思います。地道な仕事ですが、続けていきたいと思います。

[馬見塚委員]

この入選作品は、どこかに展示とかはするのですか。

[石川副館長]

入選作品については、児童のコーナーに展示するスペースを設け、そこに一定期間展示していました。作品は、現在返却作業をしているところですが、全国コンクールに出品したものは、全部コピーを取り複写したものを展示した。

[図書館長]

上位の作品は、市のホームページにPDFファイルの形式で、公開している。

[馬見塚委員]

わかりました。是非拝見したいと思います。いい循環になっていくと思います。

[委員長]

来年チャレンジする子達の参考になり、いいのではないのでしょうか。因みに、ホームページに掲載しているデータは、電子図書館あるいはデジタルアーカイブの方にも上げておくのか。

[図書館長]

方向性はまだ決めていないが、電子図書館のサイトは構築出来ており、その中に小田原市としての独自のコンテンツを公開していく領域があるので、どう使うかはこれから考えてい

きたい。著作権的に問題のないコンテンツについては、有効に使えるので、その点を踏まえて今後考えていきたい。

[委 員 長]

馬見塚委員がおっしゃったように、来年度以降に取り組む子達の参考にして頂くのであれば、なるべく見やすい環境を作っていただけるとよいと思います。是非ご検討いただければと思います。

[図 書 館 長]

追加で説明いたします。現在、市長賞・教育長賞・図書館長賞の3賞については、PDFの形でホームページで公開しています。

[委 員 長]

過去の3賞取られた作品も、データは図書館側に蓄積はされているのか。コピーの紙ベースの物だけか。

[石川副館長]

データベースで管理している。

[委 員 長]

図書館の方針が決まり、図書館が公開になったら、過去のものも併せて公開出来るようになるということか。

[図 書 館 長]

過去のものについては、公開前提でお話が出来ていない。著作権ではないが、懸念事項があり、即答出来ないところがあるので、また検討させていただきたい。

[委 員 長]

大人の作品だったら、ご本人に了承を取ればいいですが、本人はもちろん保護者の了承も必要ですね。

[図 書 館 長]

その辺りの整理は必要だと思います。

[委 員 長]

わかりました。

[長谷川委員]

応募された作品は、審査会で審査されたのですが、子ども達が発表する場みたいなものは、あったのか。

[図 書 館 長]

表彰式で、表彰者のうち3賞を受賞した子ども達から、どういった点が難しかったのか、どういったところを注意して取り組んだのかなど、その場で5分程度プレゼンテーションをして頂いた。

[長谷川委員]

わかりました。

[委 員 長]

授賞式でのプレゼンがありましたが、市民の方にご参加いただくような形での発表会みたいなものがあったても良いと思う。そういう場をどう作るかも、検討しなければならないですが、折角の力作ですし、表彰式に参加をして、子ども達のプレゼンが上手でした。教育長もすごく感動されていましたし、多くの方に見て頂き、市民の方も、子ども達が頑張っている姿を知る機会になって良いかなと思う。

[植田副館長]

動画を撮って、アーカイブで公開すれば、いつでも誰でも見られるようになる。そういったふれ込みでも良いかなと思う。

[委 員 長]

図書館で可能性を探っていただければと思います。よろしくお願いします。

4 協議事項

(1) 第三次小田原市子ども読書活動推進計画について

【資料2】

○植田副館長説明

○質疑応答

[委 員 長]

ただいま事務局から資料の2-1、資料の2-2に関して説明を頂き、第三次小田原市子ども読書活動推進計画案の全文については、前回の協議会でも協議頂いたが、全体を通して、意見がありましたらお願いしたいと思います。

[北 河 委 員]

学校図書館と図書館との連携は、重要だと思います。コロナウイルスが収束してきたので、学校と図書館がより密接な関係になるように、図書館から学校へ出向くというようなことはできないか。学校図書館には、司書の資格を持った方ばかりではなく、読書に興味のある方、図書館に熱心な方が大勢いる。しかし、研修が年1回しかなく、図書室の膨大な所蔵の管理に追われ、図書室本来の楽しさを、活用が出来ないとの声を聞く。図書館の司書の方々に出向いて頂き、学校図書館が活発になるようにしたらどうか。

[植田副館長]

来年度の学校の行事を確認すると、10月に司書の研修、5月に学校図書館協議会を開催する予定となっているので、図書館の職員が参加出来るかを、教育指導課や教育部と調整を図っていきたい。

[図 書 館 長]

北河委員からの指摘は、正にそのとおりだと思う。学校図書館、学校図書室と公共図書館

の連携は、重要だと認識されつつも、中々出来てきていないのが現実。子ども読書計画を推進する中で、この連携を重ねていくことは、かなり重要なことであるが、現状、学校図書室がどういう状況で、どのようなニーズがあるのかを把握していないので、まず、その把握が必要だと思っている。そのため、計画の中には、具体的な内容を記載していない。学校図書室からも、教えていただくことがたくさんあるので連携を重ねていきたい。

[副委員長]

学校図書館司書のお話でしたが、私はボランティア出身で、今もボランティアをしている。ボランティアの知識向上やレベルアップも重要です。司書は、週に2回ずつ2校に行っているという状況ですが、コロナでボランティアの活動が一旦消えてしまった状況で、復活というのは大変だと思いますが、その連携を強めていただく中で、例えば、講演や研修に、学校図書のボランティアも参加出来る環境にして頂きたい。13 頁の読書活動推進講演会の実施という部分ですばらしいと思うが、次の 14 頁、3 学校等の、学校における読書活動の推進と学校図書館との連携強化で、ボランティアや司書の組織のレベルアップは、連携していくことが実践的なものであると思う。

あと 1 点。以前、この協議会のメンバーとして参加していた時、出会う図書館という図書館の考え方に落ち着いたが、私はその時、出向く図書館と提案した。図鑑などの大きな本は、小学校では予算的に買えないので、図鑑類は図書館にあるということを、学校、司書、ボランティアの連携の中で認識する。具体的なことは別として、図書館のスタッフも一緒になって、学校に協力し、子どもに図書館の本を、展示などをして見せてあげる機会があると良い。すると、中央図書館や東口図書館に行けば、たくさんの図鑑類があるということを、低学年の子ども達が知れば、もっと図書館を利用してくれるようになると思う。

[委員長]

はい。ありがとうございました。

[図書館長]

大塚委員の提案の、ボランティアの研修参加については、学校司書と、ボランティアの意向はつかめていない。大塚委員の意見を踏まえて、学校と話をする中で、確認していきたいと思う。その上で、どういう形での参加が出来るのかは、現段階では見えていない。

もう 1 点、出向く図書館という考え方については、図書館の 1 つの考え方として、アウトリーチのサービスがある。この計画の中で、14 頁の「学校等における子ども読書活動の推進と連携」の中で、学校図書館へのアウトリーチ策の強化を検討という表現をしている。アウトリーチの手法でサービスを展開することも考えられるが、今後、頂いた意見も参考にさせて頂く。現状でも、団体貸出制度があり、学校単位で団体カードを持ち、図書館の本をある程度のまとめて借りて頂くことが出来る。どのようなことが出来るかは、意見を聞いていきたいと思う。

[委員長]

私も、北河委員・大塚委員のお話を伺って、学校図書館が、子ども達の学びを支える基盤だけではなく、大人になった後の図書館利用にも直結する。学校図書館の利用経験が、重要な役割を担っており、多くの市民の方々に学校に学校図書館があり、大事な役割を担っていることを知って頂くことも、大切だと思う。研修会も重要だが、中央図書館主催の読書推進の講演会など、学校図書館をテーマに、市民の方に学校図書館を知って頂くような企画を催すこともあると良い。現場の方には研修の一環になり、市民からすると、学校には学校図書館があり、子ども達には、こんな役割を果たしている事を知ることができる。そういう機会にもなるので、この計画の文言をどうこうというより、むしろ、そこに盛り込まれていることを実際に展開する中で、色々と企画出来ることがあると思うので、検討いただきたい。

少し気になったのが、パブリックコメントのご意見の中の、4ページのウの1番で、学校図書室を拡充して市内の各学校に学校図書館を開設の部分は、学校図書館を公立図書館の分館のような位置付けに出来ないかという趣旨で、市側の考えの説明もそうであり、私もそう読んだ。学校図書室と学校図書館についてだが、学校図書室という言葉はない。法的には学校図書館が正しい。細かなことのように、役割や機能を考える上では、すごく大事なポイントだと思うので指摘する。是非、市民の方も一緒に学校図書館のことを考えて頂ける機会づくりとして、講演会のようなものを企画して頂けたら嬉しい。

[勝川委員]

先ほど、図鑑などが不足しているとの意見を伺ったが、小田原市の電子図書館では、図鑑類を扱っているのか。小田原の小学校は、タブレットが普及しているので、各学校の図書室になくとも検索することで利用出来るので、提案させていただきました。

[植田副館長]

市の電子図書館では、図鑑を大量に扱ってはいない。私も、重たい本を持つよりも、電子図書館で見られれば良いと思うが、図鑑類は出版社から出ていない状況です。今後、増えていくと思っております。

タブレットについては、小学校・中学校、全校生徒に配布されていると聞いており、教育部とタブレットで電子図書館を使えないかを、調整している。

[勝川委員]

学研のアプリで、図鑑を見られるが、電子図書館での連携はないか。

[図書館長]

一般向けの電子書籍は、個人利用が対象であり、小田原市は、TRC（図書館流通センター）の、電子図書館サービスを使っている。そのコンテンツの枠組みの中で、電子図書館を利用するので、電子図書館サービスに図鑑が対象になっていないと、公開することが出来ない。この辺りは、出版社側の事情による。

[松本委員]

私の小学校で駅東口図書館へ見学に行く予定が、コロナ禍で結局行けなくなってしまった

ことを、協議会で話させて頂いた。カードを作り、そのことが契機となって図書館に行くことになった子どもが結構いられる。図書館に足を運ぶことで、図書館がどんなところかを、知ることができる校外学習を積極的に継続して提供していただけると、図書館の楽しさをわかって頂けると思う。

[石川副館長]

今年度は、2校が校外学習で図書館に来た。1月末と2月に来た酒匂小学校の2年生は、1回目に来た時に、児童コーナーで先生が団体カードを使い、子ども達に1冊ずつ好きな本を借りていこうねと声をかけ、1冊ずつ借りた。翌週、本の返却時に図書館の中を案内すると、映画を見たり、色々なことをやっていたが、図書館には、こういう面白い本があることを子ども達がわかってくれた。借りる、貸すのやりかたを学習し、私も、子ども達に図書館は面白い？と尋ね、また来てねと言ったら、すぐ翌週の日曜日に来てくれた子がいた。そうすることで学校との連携も出来るし、今年度は、2校しか来ていただけていないが、宣伝して広く活用していただければ、こういう連携から、子ども達が図書館を好きになってくれるものと実感した。

[青柳東口図書館統括責任者]

東口図書館でも、図書館を見学したいという学校があれば、積極的に受け入れており、今年度は2校あった。その際に、出来れば図書館で本を借りる体験をして欲しいので、持っていない方には、利用者カードを作ってもらうようにしている。今後も図書館を見学したいという学校があれば、カードを作って、図書館で本を借りたり、クイズを出して本を探すなど、楽しみながら図書館を利用出来るような見学などを行っている。今後も積極的に、希望があれば受け入れていきたい。

[委員長]

利用者カードを発行するというのは、いい取り組みですね。因みに、かなり、学校の先生方の図書館に対しての認識は、温度差があるような気がします。図書館が見学の受入れをしていることは、学校側にPRされているのか。

[石川副館長]

今年に来た先生方に話を聞くと、コロナ禍でやっていなかったが、以前はやっていたとのこと。また今年やってもらえますかと相談があった。

[委員長]

すると、同じ学校は毎年に来るが、そうではない学校は、そもそもそういう取り組みが出来るという考えがない可能性はあるのではないかな。

[石川副館長]

図書館の近くの学校が来やすいという事情もあるようです。

[副委員長]

そもそも、それが出来る事が学校側に知らされているのか。図書館見学を受け入れている

ことを、市内全部の学校で、中学校は別として、小学校の担当図書教諭がご存知なのか。図書館見学に来てくださいと積極的にPRして頂きたい。

[北河委員]

私が住んでいる橘地区は、中央図書館も駅前の図書館も遠いところにある。図書館とか図書室の利用率も少ないのは、もしかしたら、中学生まで大きな公共図書館に行ったことがない人もたくさんいるのではないかな。校外学習で図書館を見学が出来たら、こんなすばらしいものがあるという事を認識すると思う。橘地区や片浦地区は図書館から遠いので、図書館に行っていない子はたくさんいると思う。図書館から遠い所にある学校に、図書館見学を勧めていただけると、図書館好きの子が増えること期待している。

[委員長]

家に帰って親子で、図書館に行って、図書館がすごく良かったって、会話から親子で図書館に来ようという機会につながっていく可能性もあるので、是非、宣伝をして頂けるとありがたい。

[図書館長]

図書館利用のPR方法については、検討していく。後での話になるが、電子図書館の利用を学校で積極的に展開していく上で、今後、学校と話しをする場面があるので、機会を捉えてPRする。

[委員長]

他にいかがでしょうか。

[馬見塚委員]

学校が団体で図書館を見学出来きたら、効果的だろうと思うが、現実問題として難しいと思う。

[委員長]

そう考えると、先ほど大塚副委員長が言った出向く図書館。実際に図書館に来る機会を学校としては作れなくても、図書館がこんな素晴らしいところだという事を、図書館員の方が学校に行って子ども達に紹介する機会を作れるのかもしれない。図書館員のご負担になるかもしれないが、来てもらうのが難しければ、図書館側から出向くという、逆の発想はあるかもしれない。

[副委員長]

図書館だけではなく、学校には司書やボランティアの方、図書館のスタッフが、子ども達に図書館の良さを伝えながら提供することが出来るように、連携出来れば良いと思う。もし遠くて遠足レベルの難しさがあるのならば、そのことも逆の発想で生かせれば良いと思う。

[委員長]

館内の動画を撮って、図書館の中の様子を、お話と一緒に見てもらおうと、子ども達にイメージが伝わりやすいかもしれない。

[副委員長]

今度、お母さん、連れて行ったら、遠くの人になるかもしれないし、自分で、バスで行くお子さんもいるかもしれない。

[委員長]

実際に行くのは、学期中ではなくて夏休みに来てもらうのも良い。

[図書館長]

地域的な要因で図書館に来ることが難しい地域というのも現実にあるので、アウトリーチで補完していく考え方もある。学校図書館や学校との連携がまず土台にないと成り立たないので、何が出来るか、どういった形で出来るのかを、学校図書館や学校とお話をしながら進めていきたい。学校側にも、受け入れる時間や場所をやり繰りすることがあると思う。様々なテーマを学校自体も抱えているので、連携しながらついでにいく事が、非常に大事になる。

[馬見塚委員]

小学生でしたら、3年生か4年生時に、市内を移動して回る行事があるので、図書館も入れて連携していくといいと思う。

[委員長]

うまく学びの中に取り込んで、位置付けてするということですね。

[長谷川委員]

私も橘地区に住んでいて、図書館を知ったのは、電車やバスを使って1人で出歩けるようになった高校生の時。これが、図書館が近くにいる子どもの実態だと思う。出向く図書館で、知る機会があった方が、子ども達も、今度、親に連れて行ってもらおうとか、小学校の高学年であれば、電車とバスで移動して来ることが出来ると思う。そういったところも、PR活動として、知ってもらうところがスタートと思う。

[委員長]

資料1に戻るが、調べる学習コンクールに応募する学校は、図書館に比較的近い学校が多いのか。遠方の学校からの応募がない状況なのか。

[図書館長]

学校の所在地と応募数の関係性は、持ち合わせていないが、図書館に近い矢作小学校からの応募が、今年が多いように見受けられるが、もっと近い学校もあるので、関係性は見えてない。応募については、学校単位で申し込まれる方、個人で持ち込まれる方もあり、学校の夏休みの宿題としての取組も違うと思う。

[委員長]

個人で応募があるということは、学校経由でなく、図書館としてコンクールのPRをされているのか。

[図書館長]

学校に案内チラシを持って行っている。

[委 員 長]

中央図書館としても、情報は市のホームページで載せているのか。

[図 書 館 長]

行っている。

[委 員 長]

地理的な距離感だけではなく、保護者の方と図書館との距離感も、情報を入手するには、実際、利用されているかどうか、かなり大きく関わっている可能性はある。

[図 書 館 長]

そのとおり。

[副 委 員 長]

矢作小学校には、学校図書ボランティア連絡会の実行委員会メンバーのスタッフが大勢いる。学校図書館にボランティアとして積極的に関わっている学校図書館司書がおり、学校図書館が充実して、学校と連携されていることを知っている、なるほどと思っていた。小学生は、学校図書館で調べる学習も、きっとアドバイスを受け、こんな本あるよと言って、調べたりということもあったのではないかと想像される。学校図書館の充実はこうところで差が出てくる。

5 意見交換

より多くの方に図書館を利用していただくための方策について

【資料 3】

○事務局説明（資料に基づき石塚副館長より説明）

○質疑応答

[委 員 長]

より多くの方に図書館を利用していただくための方策ということで、委員の皆様からお考え、ご意見を寄せて頂きたい。今日は何かを決めるとかの話ではなく、自由に意見交換をしたいとのこと。先ほど、子どもの読書の文脈で、ここに関わるご意見、多々頂いたが、ここでは全年齢層ということで、利用を促していくためのアイデア等も含め、ご意見を頂きたい。

[図 書 館 長]

1 点、補足させて頂くと、データは貸出冊数を中心に示している。貸出は、図書館機能の一部で、貸出はせずに勉強で利用される方も、図書館の大事な利用者。遅い時間になると利用者が少なくなるが、開館時間の短縮を考えている訳ではない。図書館は、税金で運営されている施設なので、数字を客観的に踏まえた上で、有効に使う観点が必要。幅広に、図書館をどうやって有効に使うのか。有り体に言えば、たくさん使っていただくということになるが、幅広にご意見を頂けたら良いと思っている。

[委 員 長]

館長が言ったところが、非常に重要なポイントだと思う。利用をどう図るのか。伝統的に

は、貸出数で図る事が、図書館業界としては長く続いてきたが、最近は見直す動きもあり、利用をどう評価するかは、単に資料の貸出だけではない。貸出も、アウトリーチという手法を考えると、来館しなくても利用出来るようなサービスもある。更には、電子図書館サービスを考えると、来館と貸出をイコールで捉えていくことが、難しくなり始めている側面もあるように思う。

また、利用の実態は、勉強するために、図書館は静かだから使いたいという方もいる。利用をどこに主軸を置いて捉えていくのか。入館してもらえば利用と捉える考え方もあるのかもしれないし、どう考えるかというところがある。考え方は、結構様々であり、来てもらう人を増やしたいのだったら、ここにしかないイベントを増やすという話になる。果たして図書館がそういう捉え方でいいのかどうかは、議論のあるところだと思う。

データを見ていて思うのは、中央図書館と東口図書館で大きな差異は、建物が古いか新しいかだけではなく、アクセスの問題が結構大きい。そういうところを補うような魅力ある取り組みを、中央図書館は、来てもらうことを前提に考え、探っていくということが求められている。事務局の皆さんも、その辺りで委員の皆さんからご提案を出してもらえたら嬉しいなということかと思う。

[馬見塚委員]

野口委員長が言ったように、来館者数や貸出冊数にあまり左右されないような考え方をして欲しいという希望がある。冊数だけを追っていくと、結局、永遠にどこまでも、常に増やそう増やそうというような発想になっていってしまう。

図書館の目的は、数多く貸すことより、市民の方々がどれだけ本によって充実した人生になるか、幸せになるのが大事かと思う。それは、人によって全く違い、再三申し上げているが、それほどたくさんの本を読まない。商売柄、おかしいかもしれないが、すごく大事にしているものがあり、ゆっくりじっくり噛み締めながら読むというような読み方もあり、そういうふうな読み方も、大事にしていきたい。そういったことを前提に、これから皆さんで、どうやったら利用を促進していけるかを話していきたい。

本当に、単純に貸出数を増やしたいのであれば、売れ筋の本を入れるとか、幾らでも方法はある。マーケティングのノウハウの本などをちょっと調べれば、すぐ分かる。来館者の傾向を調べ、皆さんが何に興味をもっているのか、その傾向に合ったものを情報提供するとか。貸し出しの時だけではなくて、こちらから新刊でこんなものが入ったとか、どんどん発信していくとか、色々な方法が考えられる。

もう1つ、配本のサービスで、借りたいCDとかがある時に、有料でも、TSUTAYAなど、インターネットで申し込んで取り寄せることがある。確か、送料込みで、2、3百円ぐらいで借りられる。そのような遠隔地の方のためのサービスとかがあれば良い。

[委員長]

馬見塚委員が言った、配本・宅配は、すごく興味深い取り組みだなと思って注目している

のが、福岡県の筑後市の図書館。市内にお住まいの方には、どなたにでも本を無料で届けますというサービスをやっている。そんなお金、あるのかと思ったら、配送しているのは、市の商工会議所。市内の商店街で、多分一定金額以上なのだろうが、商店で買った商品は無料でご自宅までお届けしますというのをそこはやっているらしく、その配送ネットワークに、図書館の本も乗せてもらおうということらしい。図書館は、商工会議所に、年間数万円と言っていたが、お金は払っているらしい。それで、希望する市民の方で図書館に来館するのが難しいという方のご自宅まで、その商工会議所が本を届けますということをやっているらしい。

それを小田原でもやりましょうと言うのではなく、図書館と、市内の色々な所と、今まであまりコラボしていなかったような所と連携することで、利用の開拓に結び付くような取り組みが出来るのではないかと、その福岡県の筑後市の取り組みを見ていて思った。小田原は、本当に地域のリソースがたくさんあるので、実は図書館と組んだら、すごく図書館の利用も促進されるような取り組みが出来る。企業や商工会議所など連携先はあるのではないかと、思ったので、探っていくといけな。事例が既にあるので、馬見塚先生がおっしゃっていた宅配みたいなのところも、あまり図書館側が負担を掛けずに出来る可能性としてはあるのかもしれないなと思った。どこの商工会議所も同じことをやっているわけではないので、それを小田原が出来るかというのは、別の話だが、外とコラボしていくことで、図書館側はあまり負担を掛けずに、でも利用者を開拓していくという可能性としてはあり得る。

すぐ実現出来るかどうかよりは、こうしていったら、もっと多くの市民の方が図書館を使ってくれるのではないかとという観点で、是非ご意見を。

ちなみに、市民の方の、利用カードを持っている割合はどのくらいか。

[図書館長]

令和3年度末の登録者数としては、22,533 という数字になります。ただ、これは実際に小田原市民の方だけではなくて、全登録者数という形になると思いますので、ちょっと、市民の中での割合というのは、現時点で手持ちがない。

[委員長]

人口のパーセント的には、どれくらいになるのだろうか。

[馬見塚委員]

1割ぐらいしか登録していないということか。

[委員長]

市外の方も、もちろん。在勤・在学の方も。

[図書館長]

そうである。小田原市在住・在勤ではなくても近隣2市8町と二宮町の方も、ここの図書館を使えます。市民以外もこの数字の中には入っている。細かな内訳を見ていけば、その辺りの割合が出てくるが、そこまでの数字は持ち合わせていない。

[委 員 長]

そういった市外の方も含めて、22,000 人。そうすると、全部が市民ではないにしても、1割ぐらいの利用。残り 9 割の方にどうボトムアップしていただけるか。

実際に、例えば、1 回登録されて使われないケースが、よくある。6 年間全く利用がされていないと、カードのデータを落としていく作業をしているため、10 年前に作った方でそれ以降利用がないと、この数字の中に入っていない。リピートされないと、この数字の中に入っていないので、その点は、ちょっと加味する必要がある。

[委 員 長]

そうすると、日常的に図書館を利用して、なおかつ、カードを持って本を借りている方というのは、かなり絞られてくる可能性はある。この 22,000 人の中から、さらに 15,000 人になってしまうのか。

[図 書 館 長]

22,000 人の方達は、一応、ある程度は使っている方だということ。要するに、6 年間の中では 1 回使っているという方。

[委 員 長]

では、やっぱりその 22,000 人というところがメインユーザーというか。そこをどう広げていくかとなった時に、確か、全国平均の利用登録率は、自治体人口の 2 割とか 3 割とかとされているので、倍ぐらいに増やしたい。

[図 書 館 長]

ただ、市によって、その辺りの長期間利用していない人の扱いが、違う。ずっと累積するところもあるので、一概には中々。全国平均と、小田原市の捉えが違っているところはある。

[委 員 長]

いずれにしても、1 割でいいのか。残りの方は登録していない。もちろん、登録していない人が図書館に来ていないとは限らず、新聞を読みに来られているとか、本は借りないが、雑誌は見に来ていますとか、勉強には来ていますという人もいる。

かなり限られているところをどう増やしていくかというのは、どういう工夫か。

[副 委 員 長]

私は、SNS のツイッターでどちらの図書館も、フォローしているが、小さなイベントでも、写真付きで PR していただければいいなと感じた。ある時、東口図書館にたまたま行ったら、小田原のしらす丼のイベントやっていて、イベントがあることを知らなかったのも、ラッキー。その情報がツイッターによると、何か講演などもあったらしいので、事前に知っていたら行けたなと思った。今日も、図書館の階段の下の所に小さな展覧会的もやっており、そういった情報が、市のホームページではなくて、ツイッターなどでも載っていると、ツイッターからもホームページに行って詳しく調べることが出来るのでそういう使い方が望ましい。

[委員長]

はい。ありがとうございます。他にどうでしょう。

[松本委員]

私は、同じ立場の、同じ学校のママ友から、本が嫌いな立場からの声とかも集めてみたらいいのではないかというのを1つ言われた。

あとは、図書館で色々なランキングをやっていると思うが、色々な細かい項目のランキングがあると、借りやすいのではないか。例えば、こういう年代層はこういう本を読んでいますよとか、こういう趣味の人はこういうランキングが出ていますよとか、こういう本は字が少なめだから、低学年にはお薦めですよというのがあるといい。図書館に行った時に、何も分からないと、本があり過ぎて何を選んでいいのかがわからない面もあったりすると思うので、そういうのがあると嬉しい。

[委員長]

はい。ありがとうございます。

今日のこの意見交換は、図書館ということにフォーカスしているが、成人の不読率は5割と言われている。大人の半分は、そもそも、図書館どころではなくて、本を日常的に読まない人達で、図書館にとってだけでなく、本屋さんにとっても実は切実な課題である。子どもだけではなくて大人も含めての読書推進という観点で言うと、図書館と書店さんが何かコラボしたイベントをやっていくことも、読書ニーズを喚起していく意味では、必要なのかもしれない。

子どもの読書の推進という文脈で、先ほどの議題であつたとおりだが、大人の不読率は子どもの不読率の比ではない。貸し出しの年齢別を見ると、そうは言っても、大人で40代以上が比較的多いが、よく読んでいる市民の方々は、現に図書館ユーザーなのかもしれないし、そうではない人をどう取り込んでいくかという話になってくる。

[北河委員]

今は単行本1冊が800円とかして、上下巻とかがあるともう1,500円を超えてしまう本が高い時代になってしまっている。そもそも、本屋さんに行っても買う人がそれほどいないのではない、それが不読率に通じるのではないか。

図書館も、新刊本が中々出なかつたりすると、利用しない。しかし、この間、調べたら、趣味である探偵小説の新刊がずらっと出た。そうしたら、急いでインターネットで申し込み、小田原の東口図書館に行って利用につながった。東口図書館は、21時までやっているということで、残業があっても返しに行かれて、なおかつ、次の本を見つけられるということで、ユーザーにとっては有り難い場所になっている。

本が高くなったということも、すごく本離れの1つになっているのではないか。絵本なども、とても高い。私も読み聞かせをやっているが、自分の良いような本がなくて。本屋さんやインターネットで買おうかなと思った時に、千幾らというお金になっていると、購入を躊躇

躊躇してしまう。それは、普通のお母様方でも同じだと思う。そういうところが本離れになっている理由の1つではないかなと私は思っていますので、うまくやれば、図書館の本の利用率というのは、そういう方によっては上がってくるのではないかな。

[委員長]

図書館でいい本を見つけて、借りて読んだら良かったとなると、その本を買う利用者さんが結構多い。意外と、図書館と書店は敵対しているのではないかなという意見も聞かれるが、実は、すごく相乗効果があるのではないかと違う言い方でも言われている。うまく連携をとっていくとその辺りでうまく読書ニーズを下支えしていけるところはあるのではないかな。

先ほど、松本委員がおっしゃっていた、普段読んでいない方の意見というのを取り入れていくというのは、同感であり、小田原の図書館でも、以前、東口図書館を建てる前に、地下街で何回かイベントを開催して、市民の方に、これからどういう図書館を作るかということと一緒に考えるというような催しをやっていた。私も何回かそこに参加したが、そういったちょっと飛び出したイベントみたいなのを、大掛かりではなくてもやってみて、そこを歩いている市民の方に、ちょっと意見を、ボードか何かに貼ってもらうスタイルでいいのかもしれない。参加型であり、しかも、図書館のイベントなのだけど図書館ではない所でやっていると、リアルな利用者さんというか、現に図書館を使っていない方も、関心を向けてくれるかもしれない。

既にそういった実績が中央図書館にはあるので、そういった取り組みを利用開拓にも生かしていくといい。ハルネは、多くの方が行き交っているから、何やっているのだろうというので、足を止めて見に来てくれたりするのではないかな。

[長谷川委員]

より多く図書館を利用していただく方策というのを、アンケートで一般の方に聞いているようなことは、あるのか。

[図書館長]

一般の方にアンケートという形で問うという場面は、今までない。

[長谷川委員]

それであれば、先ほど野口委員長が言ったように、一般の方を巻き込んで幅広く皆さんの意見が聞いて、利用してもらえる可能性が高くなるといい。

[委員長]

はい。ありがとうございます。勝川委員、いかがですか。

[勝川委員]

こちらの中央図書館に来館する方達というのは、主に、アクセスは何で来るのか。

また、地域の連携みたいなので、鴨宮自動車学校の送迎バスに乗せてもらったらいいのではないかな。

[委員長]

実現出来るかどうかは別にしても、連携出来たら確かによい。

[小澤副部長]

市長は、今、公民連携ということを常に言っている。総合計画が出来た中の推進エンジンにも、公民連携としっかり入っている。あらゆる場面で民間との連携は大切だと思っている。自動車学校との連携も、実態はわからないが、聞いてみるのはいい。

[勝川委員]

先ほどもSNSの話があったが、小田原の図書館自体のホームページは、独立してあるとよい。この建物の紹介自体も、本当に情報が乏しい。館内の構図さえ検索することが出来ない。行ってみようと思った時に、私達は、ホームページで1回下調べをすることが多い。アクセスの仕方から、どんなものがあるのか、どんな建物なのかを1回ホームページとかで下調べをしてから来る。そこに、魅力的な建物があったり、イベントがあったりというのがちゃんと公開されていると、いいな、行ってみたいなという、より次の意欲が湧く。

あと、今、ホームページ自体をいじらなくても、そこにインスタとかフェイスブックとかを連携させますと、身近な情報を載せることが出来る。昔に比べるとアップする手間は減ってきている時代なので、そういうものを利用して、どんどん公開した方がいい。すごく、色々なことをやっているのをこうやって聞くと、目に入ってこない。広報小田原とかを見れば出ていたのかなとか色々思ってしまうので、すごくもったいない。もう少し、情報公開と言うのかな、一般に向けて広く見せた方がいい。

[馬見塚委員]

私も、同意見。結局、ティーンズの辺りの利用が極端に少ない。彼らの忙しさというのを考えれば、納得出来る部分もあるが、一番利用書にふれてほしい時期である。今の子ども達は、スマホで色々な情報検索をしますから、そのSNSとか何かで、小田原というキーワードでアップしていくと、目に付くこともあるのではないかな。

[図書館長]

1点だけよろしいでしょうか。2月25日に読書推進の講演会を行います。幅允孝さんという方が来られる。定員60人で募集をし、募集開始から1日半で全て埋まった。恐らく、幅允孝さんという方を知っている方の反応が、相当高いレベルで来たのだと思う。今まで、読書活動推進講演会はやっているが、1日半で募集が定員に達したということはなかったと聞いている。確かに、広報には出しましたし、ツイッターでも発信しています。ツイッターの反応は、最初からかなり良かった。あと、タウン誌とかにも出たというところもあるのですが、超えるかもしれないと思っていたが、予想以上に早かった。だから、情報が伝わるツールとして、それなりのことはやっているというふうに思っている。ただ、情報が伝わった結果の反応は、その内容によって違うと感じている。発信することももちろん大事で、ツールとして色々なものを使うこともとても大事だが、それと、その反応や利用というものとは、若干の違いが出ると、感じている。おっしゃるところは非常によくわかるが、いくら発信し

ても、どれだけ費やしても、来ない時には来ないということでしょうし、あるいは、それなりのところでも内容さえ刺されば、そういう形で跳ね返ってくると最近思ったところ。

[委 員 長]

そろそろお時間も近づいてまいりましたので。また、この意見交換の部分は、今後も機会があればこの協議会の中ではテーマとして取り上げていかれるかなと思いますので、また、そちらでも是非ご意見を聞かせていただければと思います。

はい。ありがとうございました。

6 その他

(1) 電子図書館について

【資料4】

○事務局説明（資料に基づき植田副館長より説明）

(2) 北原白秋没後 80 年記念事業参加者について

【資料5】

○事務局説明（資料に基づき図書館長より説明）

(3) 令和 5 年度図書館事業及び予算の概要について

【資料6】

○事務局説明（資料に基づき石塚副館長より説明）

○質疑応答

[委 員 長]

まとめて資料4から6の説明をいただきましたが、これら合わせまして、ご質問などがあればお願いしたい。

[長谷川委員]

資料6の中段ぐらいに、図書館サービスの充実というのがあって、その中の中央図書館管理運営事業の2点目、旧市立図書館の維持管理ということで、今、閉館されているが、今後の活用方法とかは決まっているのか。

[図 書 館 長]

旧市立図書館については、閉館したが、建物そのものが残っている。一部、資料については、令和3年のタイミングで中央図書館に移管しているが、一般資料を中心にまだ残っている。資料については、選択しながら、活用していきたいが、どこに収めるのかを含めて課題で、検討している。建物そのものは、存続させることは出来ないので、いつか取り壊していく形になるが、具体的な時期は、定まっていない。

[委 員 長]

他にご質問はあるか。

[馬見塚委員]

電子図書館を実際に読んでみたが、音で読み上げてくれる機能がいい。最近、目がすぐ疲れるもので、本当に重宝します。技術の下でどんどん増やしていただけたら嬉しい。今後の展望で、1,000冊程度まで購入予定と書いてあるので、次年度以降も増やす予定なの

かと思うが、限られた予算の中で、紙媒体の本と電子書籍について、最終的にどれくらいの比率でそろえていくのか。

[図 書 館 長]

具体的に、今後の電子と紙の比率については、まだ定めていない。提供した電子図書館サービスの方も、あくまで電子化されている本で図書館向けに提供されている本の中で選択して買っている。電子図書館の業態そのものがどのように展開していくのか、や、著作権の問題もある。国会図書館の蔵書の電子化も相当進んできているので、今後、注視していくところ。まだ先が見えてこないが、一気に電子化に移るとは、考えにくい。

[委 員 長]

第2回の図書館協議会を終了する。